

血栓再発予防に有用である可能性が示唆された。

36 食道胃静脈瘤に対する Modified 井口シャントの経験

竹石 利之・佐藤 好信・山本 智
平野謙一郎・小林 隆・渡辺 隆興
畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科

【目的】1997年11月より食道胃静脈瘤孤立性胃静脈瘤に対して左胃静脈一下大静脈シャント術(井口シャント)を15例に施行した。井口シャントの工夫とこれまでの成績を報告する。

【対象】本手術を施行した15例の年齢は平均57.8±9.70歳、術前Child-Pugh scoreは平均6.7±1.2点だった。原疾患はウイルス性肝硬変8例、アルコール性肝硬変4例などであり、内5例に肝癌合併を認めた。

【結果】15例中、在院死(肝不全)を2例に経験した他、退院可能であった。術後早期、中期の明らかなシャント閉塞は認めていない。左胃静脈一下大静脈直接吻合により手術時間の短縮が確認された。

【まとめ】井口シャントは、食道胃静脈瘤に対し、他の外科手術と同様に有効な効果が得られた。

37 劇症肝炎(急性型)に対する自己肝全温存異所性生体部分肝移植

山本 智・佐藤 好信・竹石 利之
加藤 崇・小林 隆・渡辺 隆興
小海 秀央・大橋 優智・黒崎 功
白井 良夫・畠山 勝義

新潟大学大学院消化器・一般外科

本邦において肝移植は様々な末期肝疾患に対する治療法としての認識が進み、内科的治療が困難な劇症肝炎に対しても肝移植施行例は増加してきている。

肝移植は通常、病的肝臓を全摘し、同所性にグラフトを移植する同所性肝移植として行なわれているが、劇症肝炎では肝臓が回復する可能性があ

ることから、病的肝臓の一部ないし全て残す補助的肝移植を行なうこともある。

我々は、出血性ショックを呈し全身状態が極めて不良であったこと、自己肝の再生の可能性があること、グラフト肝重量が非常に小さいことの三点より、劇症肝炎(急性型)に対して自己肝全温存補助的異所性部分肝移植を施行した。この術式の問題点とその対策についてビデオを供覧する。

第78回新潟内分泌代謝同好会

日時 平成14年10月19日(土)
場所 新潟ワシントンホテル 4F
大和の間

I. 一般演題

1 ACE-Iにより腎機能が低下した2型糖尿病の1例

城下 智・金子 晋・田村 紀子
田中 直史

新潟市民病院代謝・内分泌科(第二内科)

〔症例〕67歳、女性

【既往歴】平成9年頃：HT・HL・DM、平成13年3月：大動脈弁置換(AVR)

【現病歴】平成13年3月ASに対して当院心外科にてAVR施行され、以後高血圧治療目的にACE-Iを投与された。平成14年3月の検血にて貧血・腎機能低下を指摘され入院した。

【経過】レニン・アルドステロン系の亢進、カプトリル負荷試験にて過大反応を認めた。腎動脈造影検査にて腎動脈の狭小化をみとめ、ACE-I中止後約1ヶ月で腎機能の回復を認めた。

【結論】高血圧を合併する糖尿病の第一選択薬の一つにACE-Iがあるが、ACE-Iにより腎機能低下を起こすことがあり、使用に際して注意が必要である。